

**稲葉泰三編，『最近における東北農業の展開』，農
林省農業総合研究所刊，昭和33年，本文357頁**

著者	森 巖夫
雑誌名	農業経済研究報告
巻	2
ページ	75-81
発行年	1960-08
URL	http://hdl.handle.net/10097/33236

書 評

稲 葉 泰 三 編 「最近における東北農業の展開」

森 巖 夫

1

農地改革の評価と関連して、戦後日本の農業構造をめぐる見解の、対立的不統一がほぼ克服されてから、農業発展の動向が正当に問題にされつつある。それは、改革によって創設された自作農が新しい生産力の担当者になり、戦前のいわば前期的な諸関係を根柢から清算したという理解から出発するものであることはいうまでもないが、その後の研究において、あらためて指摘されているのは、農業発展の過程を単に一面的に、あるいは全国的マクロ的にのみとりあつかうべきではなく、階層的な分化とともに地域的な特徴という視点をとりいれて、多面的に、しかも詳細に分析すべきであるということである。というのは、ひとしく自作農といっても、そのもつ歴史と地域性によって経営の組織と規模に差異が生じ、それをとりまく社会的・経済的条件にもちがいが生まれる。そして、戦後10数年の経過は、その差異を基礎にして、階層的な分化を促進するとともに、明確な地域性を露呈させているからである。たとえば、よくいわれるように、米を中心とする商品生産が東北・北陸において、野菜・畜産・果樹などの多様な商品生産が近畿において、また、りんごは青森・長野で、みかんは静岡・愛媛で、酪農は北海道・長野においてめざましく発展している。このような地域的分化＝主産地形成が、戦後農業発展の特徴として注目しなければならないのである。

もちろん、農業の地域的分化は戦前からすすめられ、「地域性と階層性を統一的に把握する」¹⁾りような体系的研究が当時からおこなわれ、山田勝次郎著「米と繭の経済構造」（昭和17年 岩波書店刊）、栗原百寿著「日本農業の基礎構造」（昭和18年 中央公論社刊）など、すぐれた労作がいくつか公刊されている。また、戦後にいたっては、農業発達史調査会編「日本農業発達史」（昭和23年～昭和34年 中央公論社刊）に収められている諸論文、とくに「別巻上下」、宇野他編「日本農業年報」（昭和29年以降 中央公論社刊）の「地方報告」をはじめ、数多くの業績がつぎつぎ発表され、その成果が蓄積されつつある。しかし、それにもかかわらず、戦後、めまぐるしい発展と変貌をとげつつある日本農業の、なかんずくその地域性の把握にとって、それで充分とはいえないようである。そこには、なお分析されるべく残されている問題も少なくなるようにおもわれる。

まさにこのようなときに大成された、農林省農業総合研究所の「日本農業の全貌」に関する

1) 山田勝次郎著「米と繭の経済構造」P.3

研究は、「全体は各地域の総合である」²⁾ という観点から地域性の分析をとりあげ、同研究所に属する各支所を中心に、北海道・東北・九州の3地帯の農業の全貌をまとめあげた³⁾。その仕事は、実にタイムリーといわなければならない。

2

ここに紹介する、稲葉泰三編「最近における東北農業の展開——戦前との比較——」は、その全貌シリーズ地域篇の1部であって、積雪地方支所研究員による共同研究の成果である。

まず、本書に与えられた課題と構成からみていこう。

課題はもちろん、「東北農業の地域性」、つまり「東北農業の構造及び発展成長を量的並びに質的に分析し、日本農業のなかでもつ東北農業の特殊性を究明すること」、「従来東北農業の地域性として最も問題にされて来た、その後進性の実態に接近」⁴⁾ することにある。これがとくに要請されるのは、戦後日本農業のいちじるしい発展のなかで、東北の伸びはとりわけめざましく、従来先進地と目された近畿地方をある面において凌駕さえしていることによる。そして、「それにも拘らず生活水準は先進地に比し依然として低く、日常生活のうちには旧態依然たるものも多く見られ、……農村社会の二重構造はなお存続している」⁵⁾ からである。ここに、現段階における後進性の実態を把握しなければならない根拠がある。本書は、このように問題を提起する。

その研究は、与えられた共通課題にたいし、研究員各自が専門とする分野において考察し、それを共同討論によつて発展させるという体制がとられた。本書の構成と執筆者は、それを反映して、つぎのようになっている。

第1章 稲作技術の展開	鎌 形 勲
第2章 稲作経営の構造	佐 藤 賢 三
第3章 地主制の展開と農民層の分解	大 場 正 巳
第4章 農家労働力の商品化と過剰人口の形成	岸 英 次
第5章 東北地方の米価水準	稲 葉 泰 三

目次を一見して明らかなように、分析の対象はほぼ稲作農業に限られる。それは、「稲作農業を重視したのは、その東北地方に占める地位から見て、東北農業の地域性がそれに代表的に現われると見た⁶⁾」からである。また敘述の順序は、技術・生産力の変貌、経営構造の合理性

2) 的場徳三編「九州における経済と農業」における序文から引用

3) 北海道支所は伊藤俊夫編「北海道における資本と農業」、積雪地方支所は稲葉泰三編「最近における東北農業の展開」、九州支所は的場徳三編「九州における経済と農業」として、刊行している。

4) 本書 序論より引用

5) 本書 序論より引用

6) 本書 序論より引用

を検討したのち、それをめぐる生産関係である地主制、農民分解、過剰人口の問題をとりあげ、最後に、戦後の発展の契機になった米価を吟味する⁷⁾。このような問題の限定および構成は、きわめて適切であるといえよう。

さて、本論に立ち入って、最初に気付くことは、いずれの章も龐大な統計と豊富な資料を駆使していることである。375頁の本文のなかに、205の表と36の図が掲げられ、指摘する事実を充分なデーターでもつて実証している。この限りにおいて、本論の内容を理論的展開として整理することは、かならずしも容易でないが、分析されている実態をごく大まかに要約的に列挙すれば、つぎのごとくなるであろう。

(1) 夏の短い東北の稲作においては、初期生長を促進するため播種期と移植期を早め、また健苗をつくらなければならない。戦後東北農業の技術改善は、この要請にこたえて、苗代の改良（通し苗代が減少して保温折衷苗代が普及した）がとりあげられ、全般的に早播き早植えが実現した。

(2) しかし出穂期と成熟期は据置かれたため、長期化した栄養成長期に適した品種（西日本では感光性が問題となるが東北では感温性を重視）が導入されなければならない。品種の交替はこの方向にすすみ、奨励品種は上層農家において多く導入されている。

(3) 戦後東北の稲作技術における、もうひとつの発展は、施肥の改善、とりわけ肥料分施肥技術の普及、深耕による多肥の推進である。この進歩は、上述の早期栽培の採用、品種の改良、あるいは農薬の普及とあいまってすすめられているため、その効果は大きい。

(4) 土地条件の整備（東北ではめざましい）と作業の機械化によって、稲作所要労力は軽減された。だが、節約された労力の遊休化という事実を無視してはならない。

(5) 経営組織という視点から最近の変化をみれば、耕種単一経営の激増を特徴とし、東北における稲作比重の増大が目立つ（近畿では停滞ないし後退）。経営集約度では、資本集約化（労働費の減少を上廻る物財費の増加）による高度化傾向をたどり、米生産量（反当・1戸当り）の増加につれて商品経済への適応が一層進展する。

(6) 東北農業のこのような発展の契機は、今次の改革にもとめられる。東北の改革は近畿地方よりもよりスムーズにおこなわれ、小作地率と小作料率を低下させた。それだけ改革の成果は、東北において大きく、とりわけ強固であつた東北の地主制に大打撃を与えた。

(7) そこに展開した自作農的土地所有の上に、稲作農業の商品生産が進行し、一部上層農家による米生産の発展と下層農家の兼業化・貧困化の堆積が表面化し、戦前とはやや異つた分解傾向を呈しはじめた。

7) 本書が刊行されるまえに、「全貌研究資料 No. 52」として、同じ内容が謄写印刷されている。このときの順序は、本書の第1章と第3章が入れかわり、第4章と第5章が入れかわっている。もとの研究資料の構成よりは本書のほうが適切であることは確かであるが、このように変更ができるのは、それぞれの章がひとつでまとまつた論文をなしているからである。

(8) だが、この農民層分解は、先進地に比べてなおつづく労働力商品化の停滞性と過剰人口形成累積の強さによって、阻止される。それは、戦前における東北農民の職業移動先であった外地（満州・朝鮮・中国）・北方（北海道・樺太・カムチャッカ）市場が、戦後まったく閉され、最近では、永久的移動は内地大中都市の第2次、第3次産業に、季節出稼は関東以南の原始諸産業に限られ、しかもその雇用機会が乏しいことに原因している。

(9) 東北における脱農民化の不振は、それだけ過剰人口問題を深刻にする。そのため、東北農家の経済状態が好転化したといわれる戦後においても、その生活水準は近畿にくらべて低く、いわゆる二三男問題を顕在化し、農民層の全面的な零細化を惹起している。

(10) 最後に、水田農業に大きな影響を与える米価について吟味すれば、戦前の東北産米の庭先価格は、その販売先（京浜市場）において競合する関東産米より安く、北陸産米とほぼ同じであった。しかし、戦後の統制下においては、早期供出と超過供出によって、東北の米価は比較的有利になり、地方差の状況は、戦前とは逆転した。これは、戦後東北農業の発展（なかならず水田反収の増加）の主要な原因であったと考えられる。ただ上述のような供出制度上の恩恵は、近年縮少しつつあり、自由販売（闇売り）価格の安い東北では、再び米価水準が相対的に低下している。この事実は、今後の東北農業の動向を推察する上に、注目しておかなければならない。

3

以上、ごく大まかに本書の内容を要約してみたが、本書は、実に龐大な統計と資料をもって、これらの事実を実証しており、東北農業の地域性と戦前からの発展を、量的にも把握している。したがって、ここに列挙された要旨が、もし常識の範囲にとどまっていると非難されるとすれば、それは本書の欠点を示すものではなくて、このような形でまとめた紹介者の無力をあらわすものであろう。むしろ本書は、上述したように、これまでたびたび指摘はされていても、それを実証的に、あるいは量的に把握されることの少なかった諸事実について、その欠陥を補いながら体系的に分析したところに、大きな意義が存在するのである。この点は、充分評価しなければならない。

ところで、本書は副題に「戦前との比較」という標題をとっている。この戦前との対比という観点を含めて、あらためて、戦後東北農業の基本的特徴を考えてみれば、稲作を中心にした商業的農業の展開という事実を、筆頭にあげなければならないであろう⁸⁾。しかも、単に生産

8) たとえば、この事情を反映して、昭和30年の農業基本調査は商品生産の進捗と主穀生産の有無とをからみあわせて、農家を分類している。

また、その結果と各種の統計を整理分析した平野教授の研究(昭和35年度農業経済学会シンポジウムで発表)によれば、秋田・山形・宮城は、「主穀商品生産地帯」といわれるグループに属し、岩手・青森・福島も上の諸県より水田化率が低いほかは、基本的には同じグループに入ること指摘している。

物の商品化率が高まったばかりでなく、必要な生産資材は購入し、自らの労働力まで販売するようになったという総合的意味における商品経済化の進行である。

最近における東北農業の発展を、このように理解して、本書を読むとき、最初に感ずることは、この自然経済から商品経済への転化という構造変化を、本書は真正面からとりあげていないのではないかということである。もちろん、上に掲げた各項は、まさに、この発展の内容またはその側面をあらわす実態であることは間違いない。その限りにおいて、商業的農業の展開をかなり網羅的にとらえているといつてよい。しかしながら、本書は商品経済化の進行というこの基本線を、意識的に明確にすることが足りなかつたのではないかとおもわれる。

いうまでもなく、基本線を強調し、それを中心に据えながら数多くの事実を分析することは、決して戦後東北農業の発展の多面性・具体性を否定するものではない。むしろ、その多面的・具体的なものを統一的・体系的に考察し、叙述するためにこそ、このような手段が必要となるのである。

そこで、このような視点をもって、ふたたび本書にたちかえるとき、課題として提起した東北農業における生産力の発展と社会構造の後進性の関係について、より積極的に接近でき、商品生産を支えた社会的条件を、もう少し明らかにできたようにおもわれる。というのは、一般にいわれるように、東北の商業的農業は、かならずしも無条件に発展しているのではなく、その下にいわゆる「後進性」なる構造的特質をふまえ、それを基盤にして成立しているからである。この意味において、一見対立的にみえる両者は、密接不可分にむすびついており、両者を同時に分析したとき、はじめて構造的な理解が可能になると考えられる。

たしかに、本書は、まえに引用した序論の一部からもわかるように、まさにこの問題を、究明すべき中心的課題として設定している。そして、再三にわたって、この点の分析をおこなっている。それにも拘わらず、本書自ら反省しているように、東北農業の地域性のなかでもっとも肝腎な、後進性の実態の究明は、「残された問題」として保留せざるをえなかった。実に、このことこそ、上に述べた考察と叙述における方法上の問題点をあらわしているといえるのではなからうか。

さて、商品経済化の進行という基本線をつらぬきながら、東北農業の構造的な特徴を明らかにしようとするならば、なによりも流通機構の分析、あるいは独占資本と農民との関連を無視するわけにはいかない。本書は、稲作経営内容の変化、農民層分解、米価の吟味などを通じて、資本と農民との関係をかなり克明に分析している。そこには、きわめて貴重な成果が所収されている。しかし、さらにすすんで、販売組織、金融事情、農業協同組合の問題といった、流通面の特徴が端的に表現される問題までとりあげれば、戦後の変貌が一層明瞭になったように思う。それは、同じシリーズの北海道篇・九州篇が、標題に「資本と農業」、「経済と農業」と名付けて、意欲的にこの面を究明しているのとは、ある意味において対称的ともいえそうであ

る。しかし、本書序文は、「日本農業政策の基盤が、北進する米作とあわせて東北型の農民にあったのではなかろうか」⁹⁾として、この点に東北農業研究の意義をみとめている。そのことからすれば、農業政策の機能と効力がもっとも直接的に作用している、このような局面の分析を、きわめて重要なものと考えていたことがわかる。だが、それは中心的にはとりあげられなかった。

以上、わたくしは本書を読みながらうけた印象を、率直に述べた。それをふりかえってみると、上述のことはいずれも本論の枠からはみでた議論であって、本書の執筆者たちが精力的に究明した業績にたいしては、まだすこしも立入っていない。

しかし、それは、これまで繰り返しことわったように、本書は実に龐大な統計と豊富な資料を駆使した実証的研究であり、指摘する事実は疑問の余地がないほど十分に証明していることに原因する。205の表と36の図のなかには、若干の重複があることは否めないが、それにしても、まことに多方面にわたる統計と資料を、非常に手際よく処理している。それゆえ、前述のような概略的な要約では、本書の内容を十分に表現することはできない。そればかりでなく、わたくしの理解の浅薄さと整理の不充分さから、本論の内容をゆがめ、矮小化しているかもしれない。ほんとうは、みちびき出された結論の確実性ととも、分析の過程における科学性こそ、本書のもつすぐれた成果のひとつなのである。そして、このような成果をあげることができたのは、ほかならぬ積雪地方支所が、長年にわたって東北農業の解明に専心し、その業績を蓄積しつづけてきたことによる。そこには、疑問が生ずるはずはなく、完全な実証に目をうばわれてしまうだけである。

だが、本書の範囲内において、強いて注文するならば、東北農業の地域性を浮彫にするのに、多くのばあい、東北全体の数値または1県の数値を、近畿全体の数値またはその1県の数値と対比している点についてである。もちろん、資料上の制約を考えれば、えられた方法が最善のものであることはたしかであろう。しかし、なかには農業上の地帯(郡または市町村別)の段階まで掘り下げられるものも少くない。それゆえ、稲作農業の特徴をより純粹に分析するためには、むしろ特定の平坦部のみを抽出して、他地帯と比較検討するほうが適切のようにおもわれる。このことは、単に稲作をめぐる特殊性を稀薄化、弱小化してしまわないばかりでなく、東北農業という概念のなかに含まれる多様性も見失わないことになると考えられる。本書は、前述のように、稲作農業に限って敘述をすすめているので、この点は一応省略しているが、周知のように、庄内平野・仙台平野・雄物川盆地といった水田単作地帯のほかに、津軽(弘前)・信達(福島)・村山(山形)を中心にした果樹地帯、奥羽山脈・北上山脈に散在する山地農業地帯があって、それぞれ東北農業の主要な構成体になっている。統計操作上、これらの区別を無視して処理してしまつては、稲作発展の特徴を十分に浮彫りすることができず、同時に

⁹⁾ 本書 序文より引用

また、東北農業の内部における多様性・地域性を看過してしまうことになる。資料と統計が豊富だけに、このことが気にかかるのである。

さらに、地方全体または県単位の統計だけでは、個別農家の段階における実態が分析できないくらいがある。たとえば、戦後発展の指標である農業機械の普及をとってみても、それがいかなる機能と性格をもって導入されているか、いかに社会的条件をかえているか、新しい賃労働関係を創出するといってもいかなる意味で新しいか、というような問題は、一般的な統計だけでは明らかにできない。これは、ほんの一例にすぎないが、やはり、執筆者たち自らをはじめ、戦後東北各地において実施された実態調査の成果を、あわせ利用するのが望ましいとおもわれる。そればかりでなく、本書のように東北農業の地域性を実証的に究明せんとする総合的研究においてこそ、それらのいわば断片的調査成果を生かし、体系化できる能力と責任があると考えてるのである。

このような注文をつけてみても、本書にたいする評価は、少しも下るものではない。もう一度くりかえせば、この労作は、これまで指摘はされても、それらを総合的に理解し、まして量的に正しく把握されることの少なかつた東北農業について、大膽な統計と資料を駆使し、最近における東北農業の発展を、実証的・体系的に分析している。その成果は、大きく評価してよい。おそらく、同じ役割をはたしている著書は、ほかにないといってもよいであろう。

上述の紹介において、わたくしは、理解の不充分さに加えて重大な誤解をしているのではないかとおそれる。また、的はずれの議論の多かつたことを恥じる。何卒、妄評にたいする御海容と、わたくしの研究不足にたいする一層の御指導をお願いして擱筆する。

(農林省農業総合研究所刊 昭和33年 本文357頁)